

雌雄分化の悲劇

伊 藤 洋

地球上で生物が成功した最大の要因は、何と言ってもオス・メスという二つの性に分化したことだ。これを「雌雄分化」と言う。これ以前には、種の保存は専ら無性生殖によってなされていたが、これ以後、有性生殖という新たな保存システムが出現することになった。

雌雄分化が生物界にとってすごいのは、無性生殖がDNAを単純にコピーするだけなのに対して、オスとメスの組み合わせによって多彩な種の創生が可能になったことである。地球環境の急激な変化に対処していくためには、多様な子孫を輩出し、その時々環境に適応したものだけを生き残らせる確率主義しかない。無性生殖の生物たちは、その殆どが絶滅したが、有性生殖の生物は、その後、爬虫類から哺乳類、霊長類から人類にまで進化した。一億年前のジャコウネズミを先祖に持つ人類が、それゆえに大空を「翔べない」のは仕方ないとしても、ここまで高等生物になれたについては、雌雄分化が無くては全く不可能だったのである。

だが、これによってありとあらゆるややこしいことが持ち込まれたのも事実である。オスが自らのDNAを託すためには、それを許してくれるメスを探さなくてはならない。かつ、多様な種を残すためには、できるだけ多くのメスに邂逅する必要がある。そのためには、目立たなくてはいけないから、虚勢を張る。殿様ガエルの大きな腹、孔雀の羽の沢山の目玉、熱帯インコの毒々しい羽のように。

メスはメスで、良質のDNAをもつオスを利用しないと己の卵子を有効に使えない。そこで手練手管を駆使してオスを惑わす。妊娠や出産に忙殺されるために、オスに自分と子達が生き残るための手厚いサービスを要求する。こうしてオス・メス間に役割の分節が起こる。これをジェンダーという。ジェンダーにまつわる利害得失が永遠の議論を呼ぶ。

オスとメスの愛憎劇は有性生殖をとりこんだ全ての生物に課せられた試練である。この進化上のよしなしごとを「翔べない二人」の夫婦は、地獄へ続く道すがら争い続けるのであろう。まことに「雌雄分化」は罪作りなのである。